

Sir John Harington 訳 *Orlando Furioso* における アリュージョン

佐 藤 達 郎

1591年に出版された、Ludovico Ariosto 作 *Orlando Furioso* (以下 *OF* とする。アリオストの *OF* の初版は 1516 年。) の英訳の序文のなかで、翻訳者 Sir John Harington は、「古代詩人の作品を、エリザベス朝の読者がいかに読むべきか」という、古典解釈の方法論を展開しながら、古典古代の作品が内包する三つの意味レベルについて、次のように述べている。

The ancient Poets have indeed wrapped as it were in their writings divers and sundry meanings which they call the sences or mysteries thereof. First of all for the litterall sence (as it were the utmost barke or ryne) they set downe, in manner of an historie, the acts and notable exploits of some persons worthy memorie; then in the same fiction, as a second rine and somewhat more fine as it were nearer to the pith and marrow, they place the Morall sence, profitable for the active life of man, approving vertuous actions and condemning the contrarie. Manie times also under the selfesame words they comprehend some true understanding of Naturall Philosophie or sometimes of politike governement and now and then of divinitie, and these same sences that comprehend so excellent knowledge we call the Allegorie which *Plutarch* defineth to be when one thing is told and by that another is understood. Now let any man judge if it be a matter of meane art or wit to containe in one historicall narration either true or fained so many, so diverse, and so deepe conceits; but for making the matter more plaine I will alledge an example thereof. (5)

(以下、引用中の下線部は筆者の強調、引用中のスペリングは、すべて

原典通り。)

サー・ジョン・ハリントンにとって、古典は、一本の樹木であった。その一番外側の樹皮には、表層的な意味としての「物語 (ヒストリー)」があり、その内側には「道徳的意味」が、さらにその奥には、作品の髓たる「アレゴリー」が隠されている。したがって、古典の理想的読者は、物語の進行を「字義通り」受けとりことばの表層的な意味レベルに安住するのではなく、さらにその意味を深く掘り下げて、「語られていることとは別の意味」を理解しなくてはならない。さらに、ハリントンは、この序文のなかで、「Perseus と Gorgon の物語」を例にとり、古典の内包するこの三つの意味レベル、「物語」、「道徳」、「アレゴリー」について、次のような解説を加えている。

Perseus, sonne of Jupiter, is fained by the Poets to have slaine Gorgon, and after that conquest atchieved to have flowne up to heaven. The Histori-call sence is this: Perseus, the sonne of Jupiter, by the participation of Jupiters vertues that were in him, or rather comming of the stock of one of the kings of Crete or Athens so called, slew Gorgon, a tyrant in that country (Gorgon in greeke signifieth earth), and was for his vertuous parts exalted by men up into heaven. Morally it signifieth thus much: Perseus, a wise man, sonne of Jupiter, endewed with vertue from above, slayeth sinne and vice, a thing base and earthly signified by Gorgon, and so mounteth up to the skie of vertue . . . It hath also another Theological Allegorie, that the angelicall nature, daughter of the most high God the creator of all things, killing and overcomming all bodily substance, signified by Gorgon, ascended into heaven; (5)

冒頭に引用した序文の中で、ハリントンは、「物語」、「道徳」、「アレゴリー」のうち、「アレゴリー」をさらに「自然科学に関するもの」、「為政に関するもの」、「神学に関するもの」に分類しているが、この「ペルセウスとゴルゴンの物語」のなかで示されている解釈法からもわかるように、彼が分類したあらゆる意味レベルの中で、神学的アレゴリーこそが、最も高次な

意味レベルとして優位性を保っていることは否定できない。つまり、この解釈法にしたがえば、読者は、「ジュピターの子ペルセウスがゴルゴンを打ち負かし、その偉業ののち、天空に飛び立った」という古典古代の物語を、ゴルゴンによって象徴される肉体性の克服と神の国への参入という神学上のアレゴリーによって解釈しなければならないのである。さらにハリントンは、巻末の“A Briefe and Summarie Allegorie”と題する小文のなかで、このようなキリスト教的アレゴリー解釈を、*OF*という作品自体にも適用すべきであると強調している。つまり、この解釈法によれば、「Orlandoの狂気からの解放」という*OF*の主題は、最終的には“by the grace of God and the light of the Gospel he discovereth the darknesse he walked in and so comes againe to himselfe.”（「オーランドが神の恩寵と福音の光によって、これまで歩いてきた暗闇を認識し、再び彼自身へと立ち返る」）というキリスト教的意味レベルへと転移していくのである（559）。

こうしたハリントンのテキスト解釈法が、Origenes, Augustinusが開拓し、Cassianusによって明確化された中世教父たちの聖書解釈学に依拠していることは、彼が提示した三つの意味レベルが、カッシアヌスの示したそれと類似していることから明らかである。カッシアヌスによれば、“...contemplative knowledge (of Scripture) is divided into two parts, namely, the historical and the spiritual. But there are three kinds of spiritual knowledge, the tropological, the allegorical and the anagogical...” (Turner 72)。このような中世の神学的解釈学の方法論を受け継ぎながら、その解釈の対象を聖書だけではなく、文学作品というテキストにも適用したのがDanteであった。ダンテは、*Convivio*（『饗宴』）の中で、自作の解釈法に言及しながら、*La Divina Commedia*（『神曲』）には、四つの意味レベルすなわち、(1) 字義通りの意味 (the literal)、(2) 道徳的意味 (the moral)、(3) 比喩的意味 (the allegorical)、(4) 神秘的意味 (the anagogical) が内包されていると述べているが、この分類は、前述のカッシアヌスの区分法にはほぼ照応しているといっている (Ascoli 130)。中世の聖書解釈学の伝統を受

け継ぎながらも、その解釈を聖書だけでなく文学作品にも適用したという点において、ハリントンの方法は、ダンテのそれに極めて近いといえるのである。

しかしながら、さらに注目したいのは、ハリントンが *OF* 訳に付した、“An Advertisement to the Reader” というもうひとつの小文である。この小文で、ハリントンは、作品の意味レベルを、三つではなく四つのカテゴリー、すなわち、「物語」、「道德」、「アレゴリー」、そして「アリュージョン」に分類している。つまり、先ほどの序文で示された三つの意味レベルとともに、あらたに「アリュージョン」という解釈法が付与されているわけである。この「アリュージョン」に関して、ハリントンは次のように解説を加えている。“fictions to be applied to some things done or written of in times past, as also where it may be applied without offence to the time present. But these happen in verie few bookes” (17) (「過去に起こったあるいは書かれた出来事にあてはめられる話。あるいは、輦轡を買うことなく、現在の出来事にあてはめられる話。ただし、これらのことは、ほとんどの巻のなかでは起こらない」)。この四つの意味レベルによる解釈を、ハリントンは、*OF* のすべての「カント (巻)」に適用し、各巻の最後に、その巻の「物語」、「道德」、「アレゴリー」、「アリュージョン」としての意味を、脚注のような形で掲載している。「過去に起こったあるいは書かれた出来事にあてはめられる話」とは、*OF* で扱われている物語が、Hómēros や Vergilius などの過去の作品中の物語と類似性があることを示しており、「現在の出来事にあてはめられる話」とは、*OF* のなかの逸話と、現在すなわちエリザベス朝に生起した社会的事象との類似性をあらわしている。但し、ハリントン自身が「これらのことは、ほとんどこの本のなかでは起こらない」とわざわざ断っているように、「現在の出来事にあてはめられる話」というアリュージョンは、他の三つの意味レベル、特に「アレゴリー」と比べて、脚注の量としては、はるかに少なく、この点、序文や“A Briefe and Summarie Allegorie”のなかで提示された、「神学的アレゴリー」解釈

の優位性は、ここでもくずされていないといえるであろう。

だが、ここで重要なのは、このハリントン訳 *OF* の執筆が、この作品を「現在の出来事」すなわち当時の社会的事象と重ねあわせる「アリュージョン」解釈の衝動に端を発している——そのように想定される箇所が、彼の翻訳に少なからず存在するという点である。そもそも、この *OF* の全訳を 1591 年に出版する以前、彼は、この作品の 28 巻のみを訳し、手稿本というかたちで、宮廷内に回覧させていた。この 28 巻の回覧が、Elizabeth I の輦轡を買い、ハリントンは宮廷から一時追放され、エリザベスは、この回覧のさらなる罰として、28 巻のみならず、膨大な量の *OF* のすべてを訳すように、ハリントんに命じた。この 28 巻は、主筋——オーランドーのアンジェリカ (Angelica) に対する嫉妬——とは無関係な笑話であるが、ハリントンの、あえてそうした副次的に挿入された巻から *OF* を訳しはじめた理由については、ハリントン訳におけるアリュージョンの志向性という観点から一考に値する。

OF の 28 巻は、「所詮女はすべて浮気者」という主題をめぐる misogynistic discourse を中心に展開している。その主題は、直前の 27 巻中の下記の一節と密接な関係を持っている。

O womens wits, how weake you are (he said)
How soone to change you do your selves dispose?
 Observers of no faith nor good direction,
Most wretched all that trust in your protection.

(女の判断力は何と弱きもの、その変わり身は何とはやきもの。信義も分別も守ることのない おまへの庇護を信用するものは皆あわれである。)

Scott-Warren は、ハリントンがこの 28 巻の翻訳において、アリオストの原典を改変し、男女の情事が繰り広げられる寢室の場を、エリザベス一世の寢室に書き換え過去の情事を暗示させたことが、彼女の輦轡を買った直接

の原因であることを指摘している (32)。つまり、ここでハリントンは、この翻訳の意図的な改変によって、当時流布していた「処女王エリザベス」という神話に異を唱え、*chastity* という語によって象徴されるエリザベスの神話的属性を解体しようと試みているわけである。

このようなエリザベスを暗示させるアリュージョンを念頭おくと、前述の 27 卷、スタンザ 94 において、翻訳者ハリントンは、アリオストの原典にはない、さらなる独自の加筆を行っているという事実は注目に値する。つまり、このスタンザの最後の行は、アリオストの原典では、“O infelice, o miser chi ti crede!” (「お前を信用するものはなんとあわれであるか」) であるのに対し、ハリントン訳では、“Most wretched all that trust in your protection” (「おまえの庇護 protection を信用するものは、なんとあわれなとか」) と翻訳され、「おまえの庇護 protection」という語句が意図的に加筆されているのである。ハリントンは、この 27 卷、28 卷の misogynistic discourse を翻訳したとき、彼が当時念頭においていた「アリュージョン」がエリザベス一世を中心とする宮廷内の風紀の乱れであるとすれば、「おまえの庇護 protection」とは、当時彼がパトロンとして仰ぐ「エリザベス一世の庇護」ととらえても、それは決して不自然な推測ではないであろう。つまり、この推論を前提にして、スタンザ 94 を解釈すれば、それは「エリザベスの庇護を信用するものはあわれである。その考えはうつろいやすく弱々しい」という意味内容へと転じていくのである。だが、ハリントンの翻訳の加筆によって暗示された「エリザベスの庇護を信用するものはあわれである。その考えはうつろいやすく弱々しい」というアリュージョンは、果たしてエリザベスを中心とする宮廷の風紀の乱れを、喜劇的に風刺しただけのものなのだろうか。

ハリントン訳におけるアリュージョンのさらなる意味を検討するうえで極めて重要なのが、ハリントンの翻訳の改変に暗示されるエセックス伯 Robert Devereux の存在である。ハリントンとエセックス伯の親密な関係は、ハリントンが Cambridge 大学に在籍中、Francis Walsingham に宛てた、

「彼（エセックス）は、高い地位と並はずれた才能とたぐいまれな美德を備えた青年で、この私に極めて心優しい態度で接してくれます」という手紙の文面からも推測される（Scott-Warren 76）。1599 年のエセックス伯の Ireland 遠征の際、ハリントンが臣下として付き従い、彼によって knight の称号が授けられたことを考えると、ハリントンが大学卒業後も、エセックスのサークルに身を投じていた可能性は極めて高い。このようなハリントンとエセックスの親密な関係は、1596 年に出版された彼の著作 *Metamorphosis of Ajax*（『アイアースの変容』）のなかにも見いだすことができる。この記述のなかで、ハリントンは、エリザベス一世を Trajanus 帝の妃に例える一方、エセックスを「現代のトラヤヌス帝」として次のように賛美している。

Wherefore this I will frankly say for Trajan, that where soever I find a Prince or a Peere with so great vertues, and so few vices, I will honour him, love him, extoll him, admire him and pronounce this of him; that the armie is happie that hath such a Generall, the Prince happie that hath such a counsellor, the Mistresse happy that hath such a servant, ... (138)

この引用でハリントンは、トラヤヌス帝を「王であると同時に妃の servant」であると述べているが、これはあきらかにエセックスとエリザベスの結婚を念頭においた記述である（Scott-Warren 77）。エセックスの野望は、臣下である自分が王となることでエリザベスを支配し、自らの理想、すなわち England を含めた全ヨーロッパ圏をプロテスタント化することであった。

このようなエセックス政権樹立への期待というアリュージョンは、OF 訳の 5 巻にも見いだすことができる。この巻は、Scotland の王女 Guinevere と、Italy の騎士 Ariodant の恋愛とその試練を描いたものであるが、ハリントンはこの巻の末尾に加えた注釈のなかで、ギネヴィアとアリオダンテの社会的身分の異なる結婚に関して、わざわざ次のような但し書きを加えている。“For first it is no disparagement for the greatest Emperesse in the

world to marrie one that is a gentleman by birth” (68)。アリオストの原典では、ギネヴィアは、あくまでスコットランドの王女であって、ハリントン訳が提示するような女帝、しかも「世界で最も偉大な女帝」ではない。そのエリザベス一世を暗示させる女帝とジェントルマンとの結婚を、ハリントンがことさらに認めようとしていることを考えた時、ここでも彼が、エセックス政権の樹立に期待していた可能性は高いのである。

1590年代の政治的状況を考えた時、このようなハリントンのエセックス賛美は、エリザベス批判とも結びついていていた。この時期を特徴づける政治状況は、対外強硬路線を唱えるエセックス・サークルとそれに躊躇するエリザベス政権との緊張関係であった。レスター伯 Robert Dudley の大陸における軍事強硬路線を継承したエセックスが当初思い描いていたのは、France の Henry IV と同盟を結び、敵国 Spain を打破することで、イングランド主導による汎ヨーロッパ的プロテスタント国家を建設するという壮大な計画であった。このエセックスのプロテスタント的軍事強硬路線が、それに消極的なエリザベスの現実路線と衝突し、エリザベス朝政権の根幹をゆるがすきっかけとなったことは、Paul E. J. Hammer が明確に描いたところである。このように 1590 年代の政治的状況の特質のひとつは、現政権の穏健な対外政策に対して異を唱える不満分子の集団が、エセックスに望みを託しながら、エリザベスという中心点から離れたところで徐々に形成されていった点にあった。青年期以来のエセックスとの親交、アイルランド遠征における主従関係、『アイアースの変容』におけるエセックス賛辞とその政権樹立にたいする期待——このような要素を考えると、おそらくハリントンは、そうしたエセックス・サークルという集団に身を置いていたと考えられるのである。

このようなエセックスを中心とする集団の行動様式を支える思想的パラダイムのひとつがネオ・ストイシズムである。周知の通り、ネオ・ストイシズムとは、ストア思想を、キリスト教によって調整した実践哲学であるが、エリザベス朝においては、同時代の Justus Lipsius の影響によって、

1580年代から90年代にかけて急速に普及していった。このネオ・ストイシズムがエセックス・サークルに与えた影響を検討するうえでもっとも重要なのが、“constancy”という概念であろう。“constancy”とは、ネオ・ストイシズムの理論的支柱となる概念であり、イングランドにおいては、1595年以降 Sir John Stradling のリプシウス訳 *On Constancy* によって、当時の知識人に普及していった。リプシウスによれば、“constancy”とは、“a right and immovable strength of the mind, neither lifted up nor pressed down with external or casual accidents”「外的偶然に左右されない不動の正当な力」(37)と定義されるが、エセックス・サークルにおいては、この「不動の正当な力」が、プロテスタント的大義すなわち対外的軍事強硬路線と結びついていった。エセックスが、大陸への軍事強硬路線に対して優柔不断の態度、つまり *inconstant* な態度をとるエリザベス一世に対して述べた “[they] laboured under two things at this Court, delay and inconstancy, which proceeded chiefly from the sex of the queen” (De Maisse 115)、という批判も、ネオ・ストイシズム的 “constancy” がエセックスの強硬路線と密接に関連していた一例である。

このような “constancy” という概念に支えられたエセックスの強硬路線とエリザベス批判は、エセックスの近臣 Henry Wotton がエセックスの命により著した *The State of Christendom* (『キリスト教徒の国家』、1657) のなかにも見いだすことができる。『キリスト教徒の国家』は、当時のエセックスの政治的主義・信条を理解するうえで極めて貴重な資料であるが、その執筆には次のような経緯があった。事の発端は、当時のスペイン王 Felipe II が弟の家来 Escovedo の暗殺を王の近臣 Antonio Perez に命じたことにあった。ペレスが父の暗殺者であることを知ったエスコベードの息子は、彼に復讐しようとするが、当のフェリーペ二世がペレスを保護しようとしなかったため、ペレスはスペインを捨てイングランドに寝返ると、反スペイン主義を唱えるエセックスの臣下となり、彼のもとで自伝 *Pedaços de historia ô relações* (1594) を書きあらわした。エセックスはウォットンに、この自

伝で論じられた政治上の問題をとりあげた書を書き上げることを命じ、1595年頃『キリスト教徒の国家』が完成した。

『キリスト教徒の国家』は、その内容の危険性のため出版されることはなく、手稿本として宮廷内で回覧されていたが、特にエリザベス政府が警戒したのは、それが「王の廃位」の正当性を論じているからであった。

whosoever shall be declared King amongst them, cannot continue long in his place which is purchased by force and violence, and must needs . . . be subject . . . unto the diversite of humors of men that are inconstant, light, and very ready to change and alter their opinions. (145)

“constancy”という特性を欠く王の不適格性に関するこのウォットンの記述は、宮廷の政治的停滞と女王の *inconstant* な態度を批判するエセックスのことばを想起させるが、さらにウォットンは、この王の廃位という問題に関して、次のような問いかけを行っている。“whether subjects can lawfully expel their Prince out of his Country, and from his Crown and Dignity, if he do oppress them too much?” (*A Supplement to the History of the State of Christendom* 26)。この「もし国王が過度に臣下たちを虐げた場合、臣下たちがその国から国王を追放し、退位させるのが合法的かどうか」という問いに対する本書の結論は、次のようなものであった。

the best course is, to admonish such a prince of his duty, and to pray him to reform, and reform all that is amiss. But who shall admonish him? His best subjects, and other princes; . . . it may be lawful to implore, and employ their help and assistance for the speedy suppressing such a manifest and incorrigible oppressor and tyrant. (26)

つまり、このような場合の最良の方法は、優れた臣下たちあるいは他の王が、そのような王に勧告を行うことである。それでも国王がその勧告に応じない場合、他のキリスト教徒の国王の助けを借りて、すみやかに頑迷な暴君 (tyrant) を抹殺すべきである——エリザベスの退位を暗示させるこの

記述が、エセックスの反乱という形で現実化したのは、『キリスト教徒の国家』の完成から約6年後のことであった。

以上のことを前提にして、ハリントン訳 *OF* の27巻、スタンザ94を再度検討してみよう。冒頭部分は、アリオストの原典では、“Oh femminile ingegno (egli dicea)”となっているが、ハリントンはこの句を“O womens wits, how weake you are (he said)”と訳し、“how weake you are”という文を加筆することで、呼びかけの対象の判断力の弱さを強調している。又、アリオストの“ingegno”は、例えば現代英語訳では“mind”と訳されているが、ハリントンは、ここであえて“wits”（判断力）と訳している（Waldman 336）。無論これは決して不自然な翻訳ではなく、“ingegno”のもつ語感を的確に訳しているといえるが、1590年代のイングランドにおいて、この“wit”という語が、「為政者の政策能力」という意味で使用されていたことは興味深い。例えば、前述の『キリスト教徒の国家』における“wit”の使用法を見てみよう。ここでは、“wit”が“policy”の同義語として使用されていることに注目したい。

they who prevailed in their attempts and purposes, by their aid, furtherance and sufferance; thought it an especial point of wit and policy to seek and continue their Amity; yea, and sometimes to buy the same with very hard conditions; (43)

They report how he won divers Princes of *Italy* to join with him and them, with great Wit and Policy. (76)

こうした“wit”が“weak”であることの強調は、続く“inconstant”と同義の意味を有する“change”（muti）という語と密接な関連をもっている。つまり、このスタンザの一行目で政治的能力の弱さ（weak wit）という意味が付与されているとすれば、“constancy”とは対蹠の意味をもつ“change”（muti）という語には、為政者としての不適格性という意味が暗示され、そ

の意味は、次の行の“Observers of no faith”（「信義をまもらないもの」）という語句へと繋がっていくのである。このような“constancy”と対立した“weak,” “change,” “no faith”という語句は、最終行の“Most wretched all that trust in your protection”（「お前の庇護を信用するものはあわれである」）という結論に集約されることになるが、前述の通り、この訳文において、ハリントンは原文にはない“protection”という語を加筆している。つまり、この“protection”という主従関係を強調する語を挿入することで、ハリントンは、“constancy”を欠く王は臣下の信頼に値しないという、国王と臣下の緊張関係を微妙な形で暗示しているといえよう。ハリントンにとってこのスタンザにおける呼びかけの対象が、エリザベス一世であったとすれば、ここで暗示されている文脈は、単に過去のエリザベスの恋愛遊戯を風刺した喜劇的な misogynistic discourse にとどまるものではない。それは、当時エセックス・サークルが共有していたエリザベス批判、すなわち対外強硬路線に逡巡を示す“inconstant”なエリザベスに対するプロテストという、極めて生々しい宮廷内の政治的アリュージョンなのである。

以上、ハリントンの *OF* 訳におけるアリュージョンの志向性を、同時代の政治的状況という視座から検討を加えてきたが、最後に、エリザベス朝文学におけるこの問題の意味を、ハリントン訳とほぼ同時期に執筆された Robert Greene の劇作 *The Historie of Orlando Furioso*（以下グリーンの *OF* とする）との関連において考えてみたい。グリーンは *OF* の初演は、ハリントンの *OF* 訳出版と同年の 1591 年と推定されている (Gurr 107)。又、印刷本の初版は 1594 年、再版が 1599 年である。現段階で、グリーンが *OF* を執筆する際にハリントン訳 (1591) を参照したという証拠を特定することはできないが、しかし、同年に二つの *OF* が登場していることはエリザベス朝文学史において極めて興味深い事実である。

グリーンは *OF* は、オーランドのアンジェリカに対する「ジェラシー」を主題としているが、ここでグリーンは、アリオストの原典を大幅に書き

換えている。改作の第一の特徴は、オーランドーの恋愛の対象となるアンジェリカの性格描写の変更である。アリオストでは、アンジェリカが騎士メドーロと実際に不倫関係をもつことで、彼女の不貞が強調され、その関係にオーランドーは嫉妬し発狂する。一方、グリーンの *OF* では、アンジェリカはあくまで *chaste* な女王として神格化され、“*fair Queene of Love*,” “*fair Shepherdness*” (592, 944) と呼ばれる存在であり、これらは、エリザベス一世表象の神話的側面を想起させる呼称である。第二の改作の特徴としてあげられるのが、ハリントンの *OF* 訳同様、オーランドーとアンジェリカの身分の差を前提とした結婚という問題が強調されている点である。原典の結末とは異なり、騎士オーランドーと王女アンジェリカは、最終的に結婚するが、グリーンはこの作品の冒頭において、結婚前のオーランドーに “*I am no king*” (100) と語らせることで、臣下と女王の主従関係というテーマを、意識的に観客に提示している。この臣下と女王の結婚という主題は、ハリントンがわざわざ *OF* のなかで付け加えた「世界で最も偉大な女帝 (*empress*) が、ジェントルマンと結婚することは、決して不名誉なことではない」という記述における、身分違いの結婚の合法化という問題に呼応しているといっていであらう。

だが、グリーンの改作を検討するうえで、より重要なのが、アンジェリカを標的とする *misogynistic discourse* の強調という問題である。このアンジェリカに対する *misogynistic discourse* の強調は、一見第一の改作の特徴であるアンジェリカの *chastity* の強調と矛盾するように思われる。しかしながら、ここでグリーンは、アンジェリカが実際には無実であるという前提を観客に提示したうえで、その枠の中で、あらぬ嫉妬の妄想を駆り立てるオーランドーに、その *discourse* を自在に展開させているのである。そして、この *misogyny* の言説を支えるキーワードが “*inconstant*” という語であることに注目したい。

Orga. By my troth, my Lord, I thinke Angelica is a woman.

Orlando. And what of that?

Orgalio. Therefore vnconstant, mutable, hauing their loues hanging in
their eye-lids; that as they are got with a looke, so they are lost
again with a winke. (671–677)

この“i(u)nconstant”という語の使用に関連してさらに指摘すべきことは、これまで本論で検討してきた“O womens wits, how weake you are”ではじまる *OF* 訳 27 巻スタンザ 94 が、グリーンの *OF* においては、misogynistic discourse を展開するうえで中心的な役割を果たしているという事実である。前述の通り、この 27 巻の一節は、そもそも、原典においては、主筋からは逸脱した笑話であって、アンジェリカの性格描写に対して用いられたものではない。しかしながら、ここでグリーンは、あえてこの一節を、オーランドーのアンジェリカ批判の中核を占める言説として、しかもアリオストの原典をそのまま引用しながら展開させているのである。

Orlan. Fæmineum seruile genus, crudele, superbum:

Discourteous women, Natures fairest ill,

The woe of man, that first created curse,

Base female sexe, sprung from blacke Ates loynes,

Proud, [and] disdainfull, cruell, and vnjust;

O femminile ingegno, de tutti mali sede,

Come ti volgi e muti facilmente,

Contrario oggetto proprio de la fede!

O infelice, o miser chi ti crede! (717–734)

このように、グリーンがアリオストの 27 巻の一節を中心としながら、inconstant な女性の描写を強調しているという問題を、ハリントン訳にみられる政治的アリュージョンという観点から考えると、ハリントンの *OF* 訳出版と同年に上演されたこの作品に、グリーンがエリザベス批判を忍ばせ

ていた可能性は極めて高いといえるのである。

ハリントン訳 *OF* の印刷本が、主として宮廷内で読まれた可能性が高いのに対し (Scott-Warren 49–55)、グリーンの *OF* は *Strange's Men* (ストレンジ卿一座) による初演ののち、*the Queen's Men* (女王一座) の地方巡業用のレパートリーとなり、その台本は、“the tastes of a lower class of audience” に合わせて、大衆劇場用に圧縮され改変されたと推定されている (Greg 133–4, Gurr 107)。とすれば、この地方巡業による *OF* の上演は、この時期宮廷ばかりでなく大衆劇場において、すでにエリザベス批判が浸透にしていたことを立証するうえで極めて重要な手がかりとなるはずである。エリザベス批判を暗示させるグリーンの *inconstant* な女王表象は、宮廷で上演された *Lyly, Endimion* や *Mary Sidney* サークルの間で鑑賞された Samuel Daniel の *The Tragedie of Cleopatra* (1594) にも見いだされるし (Sato 16–18)、大衆劇場で上演された George Peele の *weak king* としての *David* 表象 (*David and Bethsabe*, 1599) にも連なっていく問題である。特に、二つの *OF* とリリーの『エンディミオン』(初演は、1587 年の後半から 1588 年) との女王表象における類似性の考察は、エリザベス批判というテーマが、宮廷文学から大衆劇場に流れていく際の詳細な経緯を辿るうえで、今後検討すべき課題といえるだろう。以下の引用は、リリーの『エンディミオン』において、*Cynthia* = エリザベス一世が *inconstant* として形容される一例である。

End. O fayre *Cynthia*, why doe others terme thee vnconstant, whom I haue euer founde vnmoueable? Iniurious tyme, corrupt manners, vnkind men, who finding a constancy not to be matched in my sweete Mistris, haue christned her with the name of wauering, waxing, and waning! (1.1.30–34)

以上、ハリントンの *OF* 訳 27 巻の一節における政治的意味といった問題を中心に、そこに伏在するエリザベス一世批判というアリュージョンの内

実について考察してきたわけだが、このような *OF* 訳におけるアリュージョンの重要性を念頭に置くと、彼が序文示したアリュージョンに対する神学的アレゴリー解釈の優位性は、いささか不自然の感をまねがれない。むしろ、ハリントン訳 *OF* を読み解くうえで肝要なのは、彼岸への指向性を前提としたキリスト教的アレゴリー解釈を実践しながらも、そうしたアレゴリー解釈の枠では処しきれないアリュージョンの力、すなわち、此岸において生起する政治的・社会的事象の根底に横たわる歴史の力を感得することにあるのではないだろうか。

引用文献

- Ascoli, Albert R. "Dante and Allegory." Eds. Rita Copeland and Peter T. Struck. *The Cambridge Companion to Allegory*. Cambridge: Cambridge UP, 2010. 128–135.
- Ariosto, Ludovico. *Orlando Furioso*. Eds. Santorre Debenedetti and Cesare Segre. Bologna: Commissione per i testi di lingua, 1960.
- Daniel, Samuel. *The Complete Works in Verse and Prose of Samuel Daniel*. Ed. Alexander B. Grosart. Vol. 3. New York: Russell & Russell, 1963. 5vols.
- De Maisse, [André Hurault, seigneur de]. *A Journal of All That Was Accomplished By Monsieur De Maisse Ambassador in England from King Henry IV to Queen Elizabeth Anno Domini 1597*. Eds. G. B. Harrison and R. A. Jones. London: Nonesuch P, 1931.
- Greene, Robert. *Orlando Furioso. The Life and Complete Works in Prose and Verse of Robert Greene*. Ed. Alexander B. Grosart. Rev. ed. Vol. 13. New York: Russell and Russell, 1964. 15 vols.
- Greg, W. W. *Two Elizabethan Stage Abridgements*. Oxford: Oxford UP, 1923.
- Gurr, Andrew. *The Shakespearean Stage 1574 ~ 1642*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Hammer, Paul. E. J. *The Polarisation of Elizabethan Politics: The Political Career of Robert Devereux, 2nd Earl of Essex, 1585–1597*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Harington, Sir John, trans. *Ludovico Ariosto's Orlando Furioso Translated into English Heroical Verse by Sir John Harington (1591)*. By Ludovico Ariosto. Ed. Robert McNulty. Oxford: Oxford UP, 1972.
- . *Sir John Harington's A New Discourse of a Stale Subject, Called the Metamorphosis of Ajax*. Ed. Elizabeth Story Donno. London: Routledge & Kegan Paul, 1962.
- Lipsius, Justus. *On Constancy*. Trans. Sir John Stradling. Ed. John Sellars. Exeter: Bristol Phoenix P, 2006.

- Lyly, John. *The Complete Works of John Lyly*. Ed. R. W. Bond. Vol. 3. Oxford: Oxford UP, 1902. 3 vols.
- Peele, George. *The Life and Works of George Peele*. Vol. 3. Ed. Charles Tyler Prouty. New Haven: Yale UP. 1952–70. 3 vols.
- Sato, Tatsuro. “Samuel Daniel’s Cleopatra: A Study of Representation of Elizabeth I.” *Shakespeare News* 43. 3 (2004): 14–22. (In Japanese)
- Scott-Warren, Jason. *Sir John Harington and the Book as Gift*. Oxford: Oxford UP, 2001.
- Turner, Denys. “Allegory in Christian Late Antiquity.” Eds. Rita Copeland and Peter T. Struck. *The Cambridge Companion to Allegory*. Cambridge: Cambridge UP, 2010. 71–82.
- Waldman, Guido, trans. *Orlando Furioso*. By Ludovico Ariosto. Oxford: Oxford UP, 1974.
- Wotton, Sir Henry. *The State of Christendom: Or, a Most Exact and Curious Discovery of Many Secret Passages and Hidden Mysteries of the Times*. London, 1657.